

52	松本寿昭	2005	自殺の要因とその防止(予防)対策(日本の場合)、社会学の立場から	大妻女子大学 家政系研究紀要	大妻女子大学	41		61-67
53	松本寿昭	2005	社会学の分野からみた自殺の危険因子--環境・家庭における危険因子を含む(特集 自殺予防--自殺の危険因子)	自殺予防と危機介入	日本自殺予防学会	26	1	13-18
54	川人博	2005	過労死と法社会学(シンポジウム・死そして生の法社会学)--(第3分科会『死の社会定義と法』)	法社会学	有斐閣		62	134-138
55	大野正和	2004	研究例会報告 過労死・過労自殺の心理と職場	労働社会学研究	東信堂			171-174
56	山本道雄	2004	自殺論と安楽死論の出会いの場所(特集 社会学のフロンティアと応用領域)	社会学雑誌	神戸大学社会学研究会			41722
57	永井順子	2004	精神病院における自殺--「精神病者」から「生活者」へ福祉社会学的視座から	ソシオサイエンス	早稲田大学大学院社会科学研究所	10		125-140
58	岡崎宏樹	2003	無限という病: デュルケム・パタイユ・ラカン理論による現代アノミーの分析	フォーラム現代社会学	関西社会学会		2	84-97
59	野中亮	2003	デュルケムの社会学方法論における象徴主義の問題	大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要	大阪樟蔭女子大学		2	161-175
60	松本良夫・舞田敏彦	2003	自殺率の地域差に関する研究--都道府県差の検討	武蔵野女子大学現代社会学部紀要	武蔵野女子大学現代社会学部紀要編集委員会		4	103-118
61	北中淳子	2003	「意志的な死」と病理の狭間で--自殺の医療人類学(特集:身体と医療の社会学)	三田社会学	三田社会学会		8	41740
62	森下伸也	2002	いでよ、憂国の社会学者!: グローバル化という危機と社会学の使命(特集I)現代社会の危機と社会学の役割	フォーラム現代社会学	関西社会学会		1	24-32
63	間山広朗	2002	概念分析としての言説分析: 「いじめ自殺」の「根絶=解消」へ向けて	教育社会学研究	日本教育社会学会	70		145-163
64	田中英高・寺島繁典・竹中義人ほか	2002	日本の子どもの自殺願望の背景に関する一考察: 日本-スウェーデンのアンケート調査から(パネルディスカッションIII/ライフサイクルと現代の諸問題)	心身医学	日本心身医学会	42	5	293-300
65	福島雄一	2002	<論説>生命保険契約の自殺免責約款における免責期間経過後の被保険者自殺の問題(2・完): 東京高裁平成13年1月31日判決を素材として	行政社会論集	福島大学	14	4	55-84
66	福島雄一	2002	<論説>生命保険契約の自殺免責約款における免責期間経過後の被保険者自殺の問題(1): 東京高裁平成13年1月31日判決を素材として	行政社会論集	福島大学	14	3	64-102
67	松本良夫・舞田敏彦	2002	殺人・自殺の発生動向の関連分析--20世紀後半期の日本の場合	武蔵野女子大学現代社会学部紀要	武蔵野女子大学現代社会学部紀要編集委員会		3	157-172
68	間山広朗	2001	「いじめ自殺」の語り方と「いじめ苦」(青少年)	日本教育社会学会大会発表要旨集録	日本教育社会学会		53	41734
69	島村忠義・越永重四郎	2001	東京都における自殺者の動機とその要因に関する一考察: 1984年・1990年の7年間の自殺者を中心に	日本赤十字看護大学紀要	日本赤十字看護大学	15		70-78
70	松山博光	2000	自殺コーホートの社会学的研究	社会学論叢	日本大学社会学会			33-48
71	池田祥英	2000	書評からみる『自殺論』の受容--タルドとの対立を手がかりに	社会学年誌	早稲田大学社会学会			129-141

表2 日本社会学会文献情報データベースによる「自殺」検索結果

No.	著者	刊行年	標題等
1	舞田敏彦	2009	性別・年齢層別にみた自殺率と生活不安指標の時系列的関連 武蔵野大学政治経済学部紀要 1 p.145-157
2	山本雄二	2009	ドキュメントを読む：いじめ自殺訴訟判決を例に 教育社会学研究 84 p.65-81
3	山田陽子	2008	「心の健康」の社会学序説：労働問題の医療化 現代社会学 9 p.41-60
4	貞包英之	2008	私的な死、恣意的な死：ネット自殺の社会的考察 社会学評論 58(4) p.593-607
5	荻野昌弘・雪村まゆみ	2006	語りえぬものを問うー社会調査におけるアニメーション利用の可能性 先端社会研究 4 p.205-231
6	与謝野有紀・間淵領吾	2006	自殺と社会的統合-連続的な2つの変数の関連の強さを測る：相関係数 与謝野,有紀/栗田,宣義/高田,洋/間淵,領吾/安田,雪(ed) 社会の見方、測り方：計量社会学への招待 p.67-73 勁草書房
7	間庭充幸	2005	殺人と自殺のあいだ：犯罪の深層 大谷学報 83(3/4) p.61-64
8	池田祥英	2005	タルドとデュルケムの論争：デュルケム主要著作に対するタルドの批判を中心として 大野,道邦(ed) フランス社会学理論への挑戦(日仏社会学叢書第二卷) p.135-163 恒星社厚生閣
9	安藤仁朗	2004	成人男性自殺率の現状と推計：ベイズ型コーホートモデルによる3効果の分離 厚生指標 51(2) p.17-23
10	大野道邦	2004	文化現象としての自殺：デュルケムの『自殺論』をめぐる 人間文化研究科年報 19 p.253-263
11	清水新二	2003	急増する自殺：実態・背景・対策 大阪精神保健福祉 48 p.2-20
12	松本寿昭	2003	自殺死亡率の地域分布と心理社会的要因に関する研究 大妻女子大学紀要. 家政系 39 p.87-104
13	松本寿昭	2003	宮崎県の自殺とその地域性 自殺予防と危機介入 24(1) p.34-46
14	清水新二・川野健治・石原明子ほか	2003	自殺に関する心理的社会的要因の把握方法に関する研究(平成14年度) 今田,寛睦(ed) p.30-54 国立精神神経センター精神保健研究所
15	岩崎信彦	2002	現代における自殺の諸相 紀要 31 p.203-228
16	清水新二	2002	自殺防止戦略 臨床神経科学 20(5) p.548-549
17	副田義也	2002	自死遺児について・再考 母子研究 22 p.21-37
18	松本寿昭	2002	自殺のSMRの地域間格差とその関連要因に関する研究 自殺予防と危機介入 23(1) p.46-65
19	清水新二・川野健治・宮崎朋子・平山正美・加藤勇三・秋山淳子	2002	自殺に関する心理的社会的要因の把握方法に関する研究(平成13年度) 今田,寛睦(ed) 自殺防止対策の実態に関する研究 p.30-54
20	清水新二	2001	経済環境および家族環境と中高年の自殺問題に関する研究 80p. / 健康・体力づくり事業財団
21	石原明子・清水新二	2001	近年における家族環境と中高年の自殺問題に関する研究：人口動態統計、人口動態職業、産業別統計より 精神保健研究 47 p.87-98
22	清水新二	2001	社会問題としての自殺問題・社会のメンタルヘルスを考える 心の健康 49 p.12-19

23	清水新二	2001	自殺の世代的特徴にはどんなものがありますか 秋山, 聡平/斎藤, 友紀雄 (ed) 自殺問題Q&A: 自殺予防のために 46 p. 73-75 至文堂
24	清水新二	2001	自殺には男女の違いがありますか 秋山, 聡平/斎藤, 友紀雄 (ed) 自殺問題Q&A: 自殺予防のために 46 p. 76-79 至文堂
25	副田義也	2001	自死遺児について 副田, 義也 (ed) 死の社会学 p. 195-210 岩波書店
26	清水新二	2001	遺族は支援欠き孤立 : 増える中高年の自殺 日本経済新聞 2001年10月20日朝刊 日本経済新聞
27	池田祥英	2000	書評からみる『自殺論』の受容 : タルドとの対立を手がかりに 社会学年誌 41 p. 129-141
28	清水新二	2000	退職前のストレス : 平成10年の自殺率急増をめぐる時代効果と 世代効果 ストレス科学 14(4) p. 222-230
29	副田義也	2000	自死遺児について 母子研究 20 p. 1-9
30	中野正大・大山小夜	2000	初期シカゴ学派にみる自殺研究(下) : R. S. キャンバン『自殺』 京都工芸繊維大学工芸学部研究報告. 人文 48 p. 57-95
31	吉野ヒロ子	2000	『宅配毒物自殺事件』はどのように「事件」になったのか : マ スメディアにおける「インターネット」言説の一例として 社会情報学研究 4 p. 141-151

表3 一般市民対象の社会調査調査

No.	調査名	調査主体	調査時期	配布数	回収数	回収率	サンプリング方法
1	自殺と孤独死に対する意識	第一生命経済研究所	平成19年10月15日 ～11月4日	800	774	96.8	第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出
2	生活ストレスについて	大阪市こころの健康センター	平成20年9月19日 ～9月30日	600	558	93.3	市政モニター600人(公募モニター350人、無作為抽出モニター250人)
3	「自殺対策」に関するアンケート	大和市	平成21年9月8日 ～9月14日	858	398	46.4	不明
4	自殺に関する意識調査	東京都福祉保健局	平成23年12月16日 ～12月28日	290	221	76.2	インターネット(モニターがアンケート専用サイトから回答を入力する)
5	自殺予防対策に関する意識調査	内閣府自殺対策担当	平成19年3月1日 ～3月11日	3000	1831	61.0	
6	こころの健康(自殺対策)に関する世論調査	内閣府	平成19年5月17日 ～5月27日	3000	1728	57.6	層化2段無作為抽出法
7	広島市こころの健康に関するアンケート調査	広島市社会局	平成19年6月4日～6月15日	3000	1636	54.5	住民基本台帳及び外国人登録原票から20歳以上の男女を無作為に抽出
8	自殺対策に関する意識調査	内閣府自殺対策推進室	平成20年2月21日 ～3月9日	3000	1808	60.3	層化2段無作為抽出法
9	自殺に関するアンケート	横浜市こころの健康相談センター	平成21年9月2日 ～9月16日	865	558	64.5	不明
10	自殺に関する市民アンケート	阿賀野市健康推進課	平成22年7月29日 ～8月20日	500	412	82.8	不明
11	自殺対策(精神保健)についての市民意識調査	宮崎市健康管理部	平成24年10月1日～10月16日	209	192	91.9	不明
12	平成23年度 自殺対策に関する意識調査	内閣府自殺対策推進室	平成24年1月12日 ～1月29日	3000	2017	67.2	層化2段無作為抽出法

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)
分担研究報告書

自殺をめぐる研究の現状と今後—宗教学・死生学の立場から—

研究分担者 島 蘭 進 上智大学神学部

研究協力者 堀江 宗正 東京大学大学院人文社会系研究科

研究要旨

【目的】宗教学・死生学に関わる領域のなかでも人文社会系、特に思想や文化や社会領域の研究を俯瞰することを通じて、今後どのような自殺研究が必要かを明らかにする。

【方法】先行研究を系統的にサーベイした。

【結論】これまでの研究動向に接ぎ木する形で発展が望まれる今後必要な研究としては、以下の 4 つがあげられる。(1) 宗教による自殺予防活動と遺族ケアの現状の調査 (2) 信仰・死生観と自殺観についての量的調査 (3) 自殺率と文化との関連、特にアジアについて (4) 自殺と文学以外のメディア、特にネットの影響

**A. 研究目的
はじめに**

本報告では、宗教学・死生学に関わる領域のなかでも人文社会系、特に思想や文化や社会に関わる研究を対象とする。死生学には心理学・医学的なものもあるが、他の報告執筆者との分担の関係上、これらは除外する。この領域では、これまで次の 4 つの研究ないし思想潮流が存在していたと考えられる。(1) 自殺と哲学・思想、(2) 自殺と文学、(3) 自殺と日本文化論、(4) 自殺と日本の宗教である。この最後の「自殺と日本の宗教」の関係については、180 度の視点の転換が生じてきている。かつては日本の宗教は自殺を禁止しない、むしろ特異な自殺文化の牽引者だという見方が強かったが、今日では宗教者の自殺予防活動や遺族支援などが注目されている。それを踏まえて、かつこれまでの研究動向に接ぎ木する形で発展が望まれる今後必要な研究としては、以下の 4 つがあげられる。(5) 宗教による自殺予防活動と遺族ケアの現状の調査、(6) 信仰・死生観と自殺観についての量的調査、(7) 自殺率と文化との関連、特にアジアについて、(8) 自殺と文学以外のメディア、特にネットの影響である。

以下、「これまでの研究動向」と「今後必要な研究」の二つに分けて説明してゆきたい。

B. 研究方法

これまでの研究

これまでの研究動向の客観的な整理をおこなうために、大学図書館の横断型データベースである CiNii を使った文献調査を試みた。CiNii には Books と Articles の二つのデータベースがあるが、その両方を使った。検索語は書名、論文名で「自殺 宗教」「自殺 文化」「自殺 文学」「自殺 思想」である。報告者に期待されているのは何よりも宗教学に関わる研究である。そのため、まず「自殺 宗教」で検索し、その内容を見た上で、他の検索語を決定した。また、ヒット件数が少なすぎず、多すぎもしないというのも、検索語選択の基準である。ヒットした著書・論文すべてについて、題名と要約、著書の場合は目次も参照し、有意味と思われる文献のみを残し、国内に関わるものと国外に関わるものとに分類し、とくに国内に関わるものを考察の対象とした。

なお、この文献調査の方法の限界をあらかじめ記しておく、書名・論文名などのタイトルに上

記の検索語が現れているもののみを拾い上げているため、たとえば内容が「自殺と宗教」に関わっていると看做しても、タイトルに含まれていなければ、この調査では拾い上げることができないということがある。また、関連性、有意味性を選択の基準としているので、必ずしも内容の善し悪しで選んでいるわけではない。通常の先行研究のレビューと異なり、質の高い文献の目録を作ることが目的ではない。あくまで研究の動向を把握することが目的であるので、上記のような方法で十分であると思われる。

なお、文献一覧はこの報告書の末尾にジャンルごとに分けて記す（文献の整理にはRefWorksを用いたが、出力の仕様の都合で音読み五十音順で並べ直されている）。

C. D. 結果と考察

1. 自殺と哲学・思想

しばしば他分野の自殺研究者から、宗教の自殺抑止力について期待する声上がる。キリスト教やイスラームにおける自殺禁止の教義、およびそのような宗教が浸透している社会における低い自殺率を念頭に置いたものと思われる。

しかしながら、キリスト教社会であれば、自殺を一律に否定する思想や言説が展開してきたかというところでもない。

今回の文献調査から、論文・著書などのタイトルに掲げられ、主題的に取り上げられている西洋の思想家でとくに複数の論文・著書で取り上げられているものを列挙すると、プラトン（ソクラテス）、ダン、ヒューム、ショーペンハウアー、デュルケムなどがある。これらは必ずしもキリスト教にのっとった自殺禁止論ではない。ダン、ヒューム、ショーペンハウアーはむしろ自殺擁護論で知られている。デュルケムも含めるならば、人間が自殺に傾くという現実を踏まえた上で、それについて思考するものと一括することができるだろう。日本ではとくにショーペンハウアーのペシミズムが自殺を擁護するものとして受容される。これは自らの生と死の自己決定という近代的自我の意識とも関連する。藤村操青年の自殺は1903

年であり、死生の意味への問いかけが自己決定としての自殺によって解決されるかのような哲学的自殺が注目を浴びるが、その背景には西洋の自殺論の輸入がある。

西洋における自殺論がキリスト教の文脈とどのように関連していたかを述べることは本報告書の目的ではない。おそらく本何冊分かの作業になるだろう。重要なのは近代的な死の自己決定としての自殺と、自殺を通しての社会的な自己主張や、逆に社会からの圧力による自殺とが、判然と分かつことの難しいまま存在していただろうと考えられることである。

「自殺と哲学・思想」の項目に加えられた著書・論文は、もちろん西洋の自殺論の輸入だけではない。近年の時代的变化を踏まえ、かつ自殺研究の主流である精神医学的・心理学的アプローチや統計学的アプローチを相対化するような論考もある。それがとくに顕著なのは雑誌『現代思想』の「特集 自殺論：対策の現場から」（2013年7月）である。ミシェル・フーコー以来、精神医学や心理学に関するある種のイデオロギー批判がなされているが、その延長線上にあるような仕事が散見される。自殺を病理として、また心の問題として囲い込むこと自体を歴史的に相対化し、自殺に関する現象や研究や対策がどのような概念や語彙によって規定されているのかを批判的に検討する論文が出てきている。今後どれほど発展するかは分からないが、一つの方向性として重要であるし、報告者もそのような問題意識を共有するものである。

2. 自殺と文学

自殺と文学を扱う著書・論文で、タイトルにあげられている文学者・作家としては以下があげられる。夏目漱石『こころ』（1914）、有島武郎（1923年に自殺、以下の年数は自殺年）、芥川龍之介（1927）、太宰治（1948）、三島由紀夫（1970）、川端康成（1972）である。夏目漱石自身は自殺していないが、その作品『こころ』は登場人物の自殺がテーマとなっており、しばしば考察の対象となる。それは自殺の謎、遺された者への意味、そ

の教訓を読者に考えさせるものとなっている。

ここでも近代的自我と集団的規範との関係が問われている。自分自身が許すことのできない内面のエゴ、罪悪感、乃木希典の殉死という国民的ニュースのインパクトなど、デュルケムのいう利己的自殺と利他的自殺の二分法に振り分けにくい自殺、あるいはエゴと規範の葛藤そのものが懊悩の核にあるような自殺は、たしかに文学の対象となりうるだろう。あるいは文学を通してしか理解できないものである。自殺は遺書がある場合でも、遺された者に多くの謎を残す。同時に「なぜ自殺したのか」という謎は関係者のみならず多くの人を引きつけずにはいられない。文学であれば、自殺者を直接とりあげずに、自殺の謎に迫ることができる。それが人々の自殺をめぐる感受性や志向性や規範を育てることにもなる。

上述のような日本文学を代表するそうそうたる文学者たちが（漱石以外は）自殺でその人生を締めくくっているのを見ると、自殺は文学者の実践のなかでも重要な位置を占めると言えるし、実際それをめぐって数多くの論述がなされている。自殺自体が文学的实践であり、死と生を描いてきた作家たちは、その最後に自らの死を通して自殺の物語を完成させたとも言える。

人間はむき出しの死をそのまま受容することはできず、物語や儀礼を通して死を受容する。そのような前提を、宗教学と心理学者に学んできた報告者は持っている。文学は人間の生と死を描くが、一人称文学であっても、主人公の死は物語られた途端、三人称の死になる。死を物語るとは、一人称の死や二人称の死を、それと直接は関係のない三人称の死に疎隔してショックを和らげ、それを通して間接的に自己の死や親しい他者の死を考えるための儀礼的装置として働く。

しかしながら、それはフィクションとして語られた死を現実と混同し、その通りに生きることにもつながる。作家は自殺することを通して、自らの内なる死の物語を完成させる。それを通して、遺された者に解くべき謎を残し、死についての語りを増殖させていく。

自らの意志で死を望み、自らの描いた物語の通りに死ぬという態度は、文学とは無関係に見える

戦時下での自害や、特攻隊にも通じる。そこでもエゴと規範、利己的自殺（自己本位的自殺）と利他的自殺（集団本位的自殺）のはざまでの揺れ動きを確認することができるだろう。

3. 自殺と日本文化論

最高の自己決定とも言える自殺が、国家や主君への忠誠として解釈されるならば、エゴと規範との葛藤は解消され、自殺は美化され、理想化される。切腹や心中や特攻や集団自決など、外国人の目から見て特異と思われる自殺の歴史を踏まえ、自殺を日本文化の一部として理解するような日本文化論がとくに外国人の著者らによってなされている。ピッケン『日本人の自殺』、パンゲ『自死の日本史』、オスグッド『老人と自殺——老いを排除する社会』、サミュエルズ「米国人記者が見た”もう一つの伝統文化”自殺大国ニッポンをゆく「誰か、一緒に死のうよ」(世界が見た nippon)」などである。ステレオタイプ的な見方のものもあるが、日本人の著者とは異なる問題意識で膨大な知見を集めたパンゲのような労作もある。

また、近年の日本の著者のなかには中高年、高齢者の自殺を文化的側面から理解しようとするものも見受けられる。これは従来の「自殺を肯定する日本文化」という視点を、若い世代の「自殺を否定する研究者」が自分より上の世代に適用したものと見ることもできるだろう。

4. 自殺と日本の宗教——宗教の位置づけの転換

上記のいわば「日本自殺文化論」においては、宗教も主要な位置を占めるものとして取り上げられる。仏教において自殺（じせつ）は殺生の一つとして禁止されるが、捨身は最高の布施として賞賛される。日本でも修行の延長線上の自殺としてはミイラ仏・即身成仏、補陀落渡海などがある。また神の怒りを静めるための自己犠牲としての自殺が神話のなかでも語られる。武士階級における戦場での自殺、切腹、殉死は、武士道と関連づけられ、「宗教」とは認知されないかもしれないが死生観に大きな影響を与えている。庶民の間で

も現世で結ばれない恋人同士が浄土への往生、救済を希望して心中するという現象が流行した。戦前においては国家のための死として神風特攻隊、靖国信仰・英霊崇拜などがあった。

しかしながら、文献一覧が示すとおり、「宗教」というキーワードを含む論文を見ると、2000年代以降、とくに東日本大震災以降、宗教者・宗教団体による自殺予防活動に関する文献が多数出てきていることが分かる。それに関わる論文・著書の著者名とタイトルを年代順に記しておこう。

渡邊直樹「宗教と自殺・自殺予防活動に携わる立場から」(2005)

最上多美子「自殺防止ファクターとしての宗教と信仰の役割」(2006)

斎藤友紀雄『自殺危機とそのケア(キリスト教カウンセリング講座ブックレット)』(2009)

磯村健太郎『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む』(2011)

小川有閑「自死者のゆくえ:僧侶なりの自死遺族支援の形」(2011)

『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』12(教団付置研究所懇話会「自死問題研究部会」との共同企画 自死(自殺)問題に関する特別部会)(2011)

現代宗教課題研究部会「自死(自殺)問題に関する特別部会」『浄土真宗総合研究 = Jodo Shinshu Research』(2012)

林拓弥「宗教者による自殺予防の可能性」(2012)

中下大樹「自殺、孤立、貧困……「苦」の現場を回る僧侶 二〇〇〇人の最期を見送って」(2013)

西出勇志「自死に向き合う僧侶たち 「自殺したら成仏できないのか」という重い問い」(2014)

これらの活動は教団がバックアップして取り組む場合があるかもしれないが、多くはボランティア・ベースである。たとえば相談窓口に出るのが教団組織に属する聖職者の義務というわけではない。ボランティア的な精神のある有志が協力

し合って、窓口の体勢を作っているのが現実のようである。そして、そのような有志は教団のなかではマイノリティであり、それゆえ相互協力のために、超宗教・超宗派でつながるようなネットワークを作っているようである。小川有閑「安心して悩む」とは？」(宗教情報センター<<http://www.circam.jp/columns/>>, 2013)によれば、僧侶による超宗派的な自殺予防活動のネットワークとしては以下のようなものがある。

自死・自殺に向き合う僧侶の会(旧:自殺対策に取り組む僧侶の会)

自死に向き合う関西僧侶の会(関西地方)

自死に向き合う広島僧侶の会(広島)

一般社団法人メッター

しかし、宗教者による自殺対策の動きは、宗教界や宗教学でこそ注目され、広く認知されているものの、一般社会ではほとんど知られていない。その認知を広げること自体が、宗教という窓口を知っていればアクセスするかもしれない希死念慮者に救いの機会を広げることになるだろう。

一方、日本文化論や歴史的研究において宗教と自殺の深い関わりを考えてきた著者らが、このような状況を知ったら奇妙に思うことだろう。あたかも「宗教」は自殺を予防し、遺族に寄り添うものであるかのようにとらえられているが、歴史的事実は正反対で、宗教は様々な自殺のスタイルや自殺を正当化する根拠を提供してきたではないか、と。この報告書では、「事実」の究明や、そのような転換がどのようにして、そしていつ頃から起きたのか、その意味は何なのかについて、これ以上、深入りはしない。

まずは人々の意識において宗教と自殺の関係が著しく変化しつつあることは認めなければならぬ。とくに東日本大震災後、宗教の人的活動や社会的貢献が大きくクローズアップされている宗教界・宗教学においては、宗教が自殺に否定的であることが自明視されている。とはいえ、これは偏りがあることも確認しておきたい。逆の立場から見れば、宗教が死後世界へのあこがれや、死の恐怖の軽減、自己犠牲の賞賛を通して自殺を

促す側面もあったことが、この数十年でほとんど論じられなくなってしまったのである。

E. 結論

今後必要な研究

5. 宗教による自殺予防活動と遺族ケアの現状の調査

よく知られているように、キリスト教やイスラームにおいて自殺は強く禁止され、これらが強い国では自殺率が低い。それゆえ、自殺対策の一つとして「宗教の力」に期待が寄せられ、実際に宗教者が自殺対策に乗り出すことに、何ら不合理な点はない。だが、日本の宗教は上記の一神教的宗教に比べると自殺を罪として禁止する姿勢がそれほど強くない（もちろん基本的には反対である）。したがって、一部の宗教者の取り組みを超えて、信仰そのものに「自殺予防機能」のようなものを本当に期待できるのかは疑問である。活動する「宗教者」ではなく「信者」のレベルでどの程度宗教が抑止力になっているのかを知りたい。仮に信者において自殺禁止が徹底していたとして、別の角度からの懸念も生じうる。強すぎる自殺禁止は過度の罪悪感を信者に植え付ける可能性がある。とくに日本では、熱心な信仰者ほど社会のマイノリティとなり、教団という共同体の適切な支えを失えば心理的に孤立する可能性がある。これは宗教に限らないのかもしれないが、自殺禁止と自殺者非難・タブー視は裏表の関係にあり、強すぎる禁止は希死念慮者および既遂者遺族の孤立につながる可能性もある。

しかし幸いにも、日本の宗教は過度の禁止圧力に傾くことはなさそうである。これはパネル討論会（2014年3月2日）に出席していた複数の僧侶のリアクションからも確認された。個別事例の検討が必要だが、自殺者を追悼・供養の枠から外すということは聞いたことがなく、少なくとも形式的には非自殺者と同等の弔いを受けている。その際に、宗教者が適切に遺族ケアをおこなうならば、遺族の感情を解きほぐし、自殺の連鎖を防ぎ、自殺タブー視の傾向を緩和する方向に導くかも

しれない。

今後、必要な研究としては、何よりも実態の解明があげられる。これまでの取り組みの事例の体系的な集約と分析である。その際に、実践者のネットワークが実践の活性化以上に、事例の調査・研究の上でも重要になると思われる。研究班のなかでの議論でも取り上げられたが、現在、人を調査対象とする研究に求められる倫理的配慮の水準は厳しくなる傾向がある。活動に関わることなく、客観的に事例のデータを収集しようとする、当事者の理解を得るのが困難な場合もある。また、実践者にアクセスしても、守秘義務があるので細かな事例の聴取はできない。一方で、研究者が超宗教的・超宗派的な枠組を作ることで、活動の社会的信頼性を高めることへの期待も大きい。そこで、研究者が団体同士の連携を助け、知見の整理に努めるという立場で、個別事例の客観的データではなく、実践者の主観的な体験知の共有を助け、それを通して取り組みの体系的な集約や分析をおこなうというアクション・リサーチ的手法が、可能かつ有益な選択肢として見えてくる。

すでに今回の研究班の一人である島菌進が深く関わっているものとして、宗教者災害支援連絡会（宗援連）、東北大学などの臨床宗教師養成の試み、現在構築しつつある臨床宗教教育ネットワークがある。これらは自殺に特化したものではなく、被災者全般のケア、ターミナル・ケア、スピリチュアル・ケア、グリーフ・ケアなどと専門を細かく分けることもできる。しかし、被災者の自殺の予防、病気を苦とした自殺の予防、そして自殺者の遺族への対応などが、これらのケア提供者の仕事には含まれるだろう。したがって、これらのネットワークをさらにつなげることで、自殺対策活動の実態解明が進み、それがひいては自殺総合対策への還元にもつながると期待される。

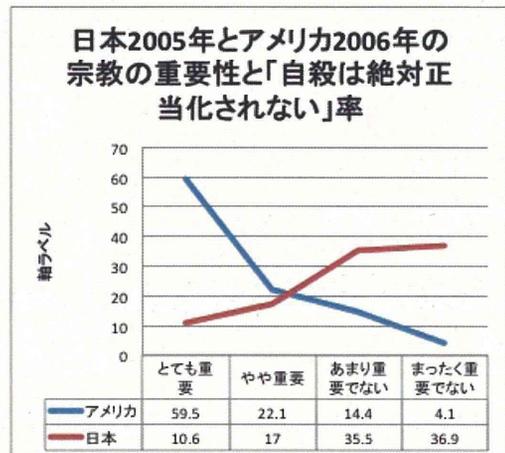
6. 信仰・死生観と自殺観についての量的調査

しかし、それと並行して「日本自殺文化論」とでも呼ぶべきオールド・パラダイムとの接合も視野に入れておかなければならない。「オールド」とは呼んでみたものの、これはあくまで、研究者

や対策の専門家目から見た「オールド」であり、一般国民の意識とはかけ離れているかもしれない。宗教と自殺の関係性の転換を考察するためには、画期となるメルクマールの確認や歴史的推移の跡づけが必要だが、それ以前に人々の信仰と死生観と自殺観との関係の正確な把握が必要である。専門家以外の「日本人」の意識を広く量的に把握し、それを土台として、なぜそのような結果が出たのかを、社会の歴史的变化と関わらせ、無理のない証拠を積み上げてゆくことで、はじめて上記の「転換」を理解することが可能になるだろう。

以下、今後の量的な死生観研究（広く信仰と自殺観も含めた総称とする）で具体的な質問項目として考えられるものを挙げる。

- 1) まず日本人の自殺観の転換は起きているのか。少なくとも「自殺は絶対にしてはいけない」という意識はどの程度広まっているのか。この質問項目は、世界価値観調査の質問項目にもなっている。また、既存の各種調査にも含まれている。したがって、ある程度の時間的推移を見ることができる。それをとらえて自殺の「許容」から「禁止」への転換が起きたのか、起きていないのか、もし起きたとしたら、いつ起きたのか、そしてその要因としては何が考えられるかを歴史的に研究することが可能である。
- 2) 信仰・死生観に関する調査はすでに様々なものがある。しかし、それと自殺観との関連についてはきちんとした量的調査がなされていない。報告者は、世界価値観調査のオンライン・データ分析を用いて、宗教の重要度と自殺への不寛容をクロス集計した（下図を参照）。その結果、アメリカでは宗教を重要と考える人ほど、「自殺は絶対正当化されない」と答える人が多いことが分かった。これは強い自殺禁止規範がキリスト教にあることを考えれば当然の結果と言える。ところが、日本においてはまったく正反対の結果が出た。つまり、宗教を「とても重要」だと考えている人の間で、「自殺は絶対正当化されない」と答える人の割合はもっとも低く、逆に「宗教



はあまり重要でない／まったく重要でない」と答えた人においては高かったのである。このことだけでも、日本では信仰が自殺抑止に働いていないことが分かる。言い方を変えれば旧来の「日本自殺文化論」は決して今日においてもオールド・パラダイムとしては片付けられない。もちろんこのデータのあと、日本では自殺防止への取り組みがなされ、様々な広報・宣伝もなされ、宗教者の動きも活発になっているので、急激な変化が起きているかもしれない。いずれにしても、現在同種の質問でどのような結果が出るかを確かめなければならない。

- 3) 上に示した日米の二つのパターンは、この二国間のみで確認されるものではない。詳細は省くが、各国を比較すると、宗教の重要性が高い国と低い国との差異があるのではないかと見ている。同時に、宗教と自殺の関連については、国別ではなく、宗教別に考える必要もあるだろう。しかし、日本の場合「仏教徒」と言っても家の宗教としてとらえている回答者が混ざるのを排除できない。このような難しさもあり、各種の宗教意識調査においても、信じる宗教別の考察はあまり重視されていない。宗教との関係が一義的であると仮定せずに、しかし宗教と自殺の関係についてより細かい理論的仮定を考え、質問項目を設定しなければならない。試みにキリスト教と仏教について、自殺と関連性のある要因を考えてみる。

キリスト教においては当初から自殺を禁止

していたわけでない。ローマ帝国の国教となる以前はキリストに倣って殉教するものが後を絶たなかった。信者の立場からはこれを「自殺」ととらえるのは抵抗があると思われるが、宗教学においては広義の宗教的自殺とされている。それを誘引していたのは、「死後生」の観念と「自己犠牲」の美德である。「自殺禁止」の規範は、既成宗教化し、殉教の必要性がなくなってから形成されたのである。現代でもイスラームの自爆テロには「死後生」と「自己犠牲」の要素が見いだされるであろう。

仏教は早い時期に自殺（じせつ）を禁止しているが、同時に自己犠牲的な捨身（しゃしん）を最高の布施として肯定しており、ここでも「自己犠牲」は宗教的自殺の重要な要因である。釈迦は前世において捨身をおこなって徳を積み、現世で仏陀になったとされる。さらに病気による苦しみが酷い場合の自死や、修行の一環としての死など、例外的に許容されるケースがあつたから発展する。来世における救済・解脱とも連動しており、やはり「死後生」の観念が自殺を誘引することが確認される。日本では心中などに来世における救済への希求が見られる。日本自殺文化論で取り上げられるような自殺においても、キリスト教の殉教と同様「自己犠牲」と「死後生」の要素を持っていると仮定できる。

- 4) 以上の宗教史的考察から量的調査において必要な項目を理論的に仮定すると次のようになる。まず、「宗教の信仰」は聞く必要がある。信じている宗教の名前を特定するかどうかは調査の規模によるだろう。なぜなら、信じている宗教の名前をはっきりと言える日本人は全体のなかでの割合としては少なくなるからである。

加えて前項で言及した死後生の観念に当たる「死後の生命」、「生まれ変わり」について尋ねることが考えられる。この二つは同じように思えるが、教育学、および俗説では、「生まれ変わり」がとくに自殺を促すという見解があり、検証項目として別立てに質問するべきである。

同じく宗教的自殺の重要な動機である「自己犠牲」については、直接的に尋ねるような質問項目を立てるのが難しい。しかし、「責任を取っての自殺」への賛否という聞き方なら一般的にも意味をなすであろう。

「自殺禁止」規範については、「自殺をしてはいけない」かどうかを直接質問すればよいので簡単である。それと関連して、現代の宗教のなかには「自殺をした魂は苦しみつづける」という教説によって自殺を食い止めようとするものもある。この教説は、自殺を誘引する「死後生」と「自殺禁止」を結びつけ、その潜在的葛藤を解消する役割を果たしていると思われる。

一方、自殺禁止規範は、ともすれば自殺のタブー視（自殺者への非難を含む）につながる。そこでとくに宗教のみと関連する質問ではないが、「自殺タブー視」項目として、「自殺は病気だ」「自殺は愚かだ」などを設定してもよいだろう。

- 5) 死生学の関心に広げると、従来の死生観調査で、自殺に関する質問項目はほとんどない。したがって、より広範な死生観と自殺観との関連を探る必要もある。たとえば、世論調査レベルですでに、延命治療に関する質問は広くなされている。「治る見込みがないのなら延命治療はしてもらいたくない」という質問文については、朝日新聞の調査だと8割が肯定的である（朝日新聞「死生観 本社世論調査」2010年11月4日）。延命治療の不開始・中止については、それを押し進めようとする医療者勢力があり、自殺との関連はほとんど問題とされていないが、自殺の原因の上位に病苦があることから、理論的には関連性を問うべきである。そこで「病気を苦にした自殺は理解できる」かどうかを尋ねると同時に、延命治療への見解とその他の自殺に関する質問との関係を問うことには意味がある。
- 6) 上記以外で、心理学的な死生観尺度に含められているものとしては、「私は死が怖い」、「死ぬと苦痛を感じなくなる」、「死についてはあまり考えたくない」、「自分の人生は

生きる意味があると思う」などがある（平井ほか2000「死生観に関する研究」『死の臨床』23(1), 71-76）。これらも調査項目が多すぎなければ、入れてもよいだろう。

以上の設問は、回答結果どうしの統計的な有意性を確認することを前提としている。そこで宗教学者だけでなく統計的処理の専門家の協力が必要である。今回の研究班では山本功がこのような研究に興味を示しており、今後、共同研究を進めることも視野に入れている。また、山本は調査会社の協力を得て、2014年3月中に試行的なネット調査をおこなっている。その分析については、4月以降におこない、将来的には論文として発表することが見込まれる。

7. 自殺の比較文化研究

日本自殺文化論など、これまでの文化的な自殺論は、日本と西洋を対比するきらいがある。しかしながら、日本を追いかけ、追い越す形で韓国では自殺率が急上昇している。その他、非西洋諸国でも自殺率の高い国がある。今後の比較文化研究においては、日本と西洋の対比にとどまらず、このような自殺率の高い地域を視野に収めた文化と宗教にまたがる研究が必要である。自殺率と文化・宗教の関連、具体的には先述の死後生、自己犠牲との関連を比較し、考察することは有意義だろう。とくにアジア地域は、死後生観念において日本との共通性があり、地理的にも研究交流がしやすいので、研究戦略上、重要な比較対象である。

8. 物語としての自殺——自殺と文学以外のメディア

「自殺と文学」というテーマの研究は、今日的な状況を踏まえると、狭い意味での「文学」を超えてより広い情報環境を対象とするものに練り上げる必要がある。今日では「文学」を超えた広範囲にわたるメディア環境が人々に強い影響をもたらしている。とくにネットの影響も含めた研

究がなされなければならない。

まず、「自殺」を描くメディアにはどのようなものがあるのか。どのメディアが強い影響力を持っているのか。そこにおいて「自殺」はどのように表象されているのか。それは従来の文学の取り上げ方、描き方とどう異なるのか。

一方で、自殺に対する「予防」「対策」、とくに人間の生命を労働力と見なして、経済的損失の観点から自殺を害悪視する世俗的な「自殺禁止規範」に対しては、大衆レベル、ネットやサブカルチャーにおいてははっきりと反発の声が表明されている（今一生 編著『生きちゃってるし、死なないし——リストカット&オーバードーズ依存症』晶文社）。他方、延命の不開始・中止などに見られるように、労働力として換算されなくなった生命には「尊厳」ある死、「平穩」で「自然」な死を医療者が与えることで、医療費が削減され、経済的効果が上がるという議論もなされており、それに対する批判も高まりつつある。人間を「いのち」としてよりも調整可能な労働力として見るような経済至上主義の風潮のもとで、自分は無用である、生きていても無益であると考え込まされた人々が自殺に向かっているとすれば、世俗的自殺禁止規範は、希死念慮者にとって逆効果なのではないか。

このような複雑な背景のなかで、自殺の表象を理解する必要がある。何が自殺で何が自殺でないのか。その線引きは、かつては宗教、今日では社会の主流のイデオロギーが決定している。それはどのようなものであり、また自殺の物語と自殺の現実にとどのような影響をもたらしているのか。

以上は、かなり大きなマクロ・レベルの問いである。その手前で検討しなければいけないのは、物語られた自殺と現実の自殺とのミクロな関係である。たとえば、希死念慮のある人にとってどのような物語がどのような条件のもとで、トリガーとなったり、カタルシスとなったりするのか。「カタルシス」という考えは危険で、安全よりも立つならば自殺を描写した物語は「トリガー」とみるべきであり、規制が必要だという立場もあるだろう。しかし、それは表現の自由と摩擦を生じ、現代社会では支持を得にくい。性急な規制よりも

その手前で考えるべきことの方が、多くあるように思われる。

逆に自殺を禁止する言論、つまり予防や対策に当たる研究者も含めた情報および、自殺はよくないと暗に啓蒙するような物語——制作側には自殺を賛美しないようにというプレッシャーが常に課されている——には、予防効果があるのか。それとも自殺者非難やタブー視を助長し、孤立を深めるという逆効果があるのではないか。

物語環境から広い情報環境へと目を転じるならば、自殺タブー視を解きほぐし、自由に語れる環境を構築するという事は、場合によっては自殺容認論、かつて日本の自殺に大きな影響を及ぼした自殺擁護論とどう向きあうかという問題に

もつながる。哲学的な自殺擁護論は、キリスト教的な自殺禁止論に対抗してできたものであった。延命治療の不開始・中止を正当化しようとする本がよく売れていることを見ると、新たな形での自殺擁護論へのニーズは潜在的にあると思われる。

自殺禁止と自殺タブー視のジレンマを解きほぐすのに、宗教の項目で述べたような、自殺は容認しないけれど、供養という形で向きあうことで自殺タブー視の傾向を和らげようとする宗教者の態度が参考になるかもしれない。それを現代的な自殺情報環境に適用することはできないだろうか。それは「対策」を訴える実践者にとっても、必要な態度ではないか。

参考文献

【自殺と思想】

〈国外〉

- Donne John・Sullivan Ernest W.・吉田 幸子・久野 幸子・岡村 眞紀子・齋藤 美和, 2008, 『ジョン・ダン 自殺論』英宝社.
- Fukuwaka Masato・福若 眞人, 2012, 「レヴィナス思想における主体性と自殺の関係: 「自殺する側」に答える「自殺される側」の変容」『人間社会学研究集録』7: 27-47.
- Hillman James・樋口 和彦・武田 憲道, 1982, 『自殺と魂』創元社.
- Hume David, 1711-1776・福鎌 忠恕(1916)・斎藤 繁雄, 1985, 『奇蹟論・迷信論・自殺論 / デイヴィッド・ヒューム [著]; 福鎌忠恕, 斎藤繁雄訳』法政大学出版局.
- Pearson Linnea・Purtilo Ruth B.・岡本 浜江, 1978, 『自殺のパンセ: 自殺についての往復書簡』サンリオ.
- Schopenhauer Arthur, 1788-1860・石井 立(1923), 2012, 『自殺について / ショーペンハウエル[著]; 石井立 訳』角川学芸出版; 角川グループパブリッシング (発売).
- Schopenhauer Arthur・斎藤 信治, 1979, 『自殺について: 他四篇』岩波書店.
- カンパニョーラ フランチェスコ, 2013, 「自己、社会、そして神に反して: 哲学・法学・文学に見る一八世紀イタリアの自殺論 (特集 自殺論: 対策の現場から)」『現代思想』41(7): 226-237.
- 上田 健二・ウエダ ケンジ・Ueda Kenji, 2004, 「その死を求める人格の権利: アルトゥール・カウフマンの「人格的」法哲学における自殺と安楽死」『同志社法學』55(6): 1403-1431.
- 会沢 久仁子, 2002, 「ヒューム哲学の、医療哲学・倫理学における注目点-動物の道徳的地位と、自殺(安楽死)をめぐって」『医療・生命と倫理・社会』(1): 22-28.
- 厚東 洋輔, 1989, 「「デュルケムと女性,あるいは未完の『自殺論』」-アノミ-概念の形成と転変」フィリップ・ベナル著 杉山光信,三浦耕吉郎訳『思想』: p70-73.
- 合田 正人, 2011, 「三万人が自殺し続ける社会で フランツ・カフカ『巢穴』(総特集 震災以後を生きるための50冊-- (3・11)の思想のダイアグラム)-- (破局/復興)」『現代思想』39(9): 66-69.
- 富積 厚文, 2010, 「スピノザ思想と自殺の問題--生きることの意味とは何か」『宗教哲学研究』(27): 44-58.
- 小島 和男, 2002, 「ソクラテスの死についての小論: プラトン『パイドン』における自殺禁止論をめぐって」『哲学会誌』26: 1-21.

- 島崎 昇平・大西 良・占部 尊士, 2010, 「高齢者の自殺予防の理論的展開--デュルケームの自殺論とパットナムのソーシャルキャピタルの概念を用いて」『久留米大学大学院比較文化研究論集』(26): 27-35.
- 平尾 昌宏, 2002, 「生命と倫理：ソクラテスとの対比によるスピノザの自殺論」『立命館哲学』13: 63-82.
- 斎藤 友紀雄, 2012, 「自殺と宗教：ジョン・ダンの自殺論を軸に」『自殺予防と危機介入』32(1): 80-87.
- 朴 一功, 1993, 「プラトンの「自殺禁止説」」『古代哲学研究室紀要：Hypothesis：The Proceedings of the Department of Ancient Philosophy at Kyoto University』3: 1-14.
- 松永 幸子, 2010, 「18世紀後半イギリスにおける人命救助と自殺防止--王立人道協会(Royal Humane Society)の誕生とその思想」『イギリス哲学研究』(33): 67-82.
- 藤本 拓也, 2011, 「シオランの自殺念慮と自己受容--無用性から無名の宗教性へ」『死生学研究』(15): 82-108.
- 麻生 享志, 2003, 「「論理学」による自殺の諫止--デューイの論理思想から」『国士館哲学』(7): 57-66.

〈国内〉

- Wolfe Alan・島 弘之, 1987, 「自殺と日本のポストモダン（日本のポストモダン--ボストンにおけるワークショップ）」『現代思想』15(15): p8-22.
- 中 真生, 2001, 「死を選ぶこと--安楽死と自殺」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室応用倫理・哲学論集』(1): 95-106.
- 丹生谷 貴志, 1989, 「自殺の思考（との論理）」『現代思想』17(7): p260-268.
- 井村 恒郎・日高 六郎, 1954, 「自殺はあなたの心にも」『思想の科学』1(1): 67-74.
- 今泉 孝太郎, 1951, 「自殺の哲学」『新文明』1(3): 10-14.
- 佐伯 啓思, 1999, 「国家についての考察 「死の欲動」に抗する自死（特集 自殺の流行と自死の思想）」『発言者』: 44-49.
- 加藤 茂, 1981, 『人間はなぜ自殺するか：その現象学的考察』勁草書房.
- , 1980, 『自殺の現象学：生の亀裂』高文堂出版社.
- 北澤 毅, 2008, 「「いじめ自殺」物語の解体（特集=学校改革-教師の現場）」『現代思想』36(4): 200-213.
- 合田 正人, 2011, 「三万人が自殺し続ける社会で フランツ・カフカ『巢穴』（総特集 震災以後を生きるための50冊--〈3・11〉の思想のダイアグラム）--（破局/復興）」『現代思想』39(9): 66-69.
- 堀 正士・Hori Masashi, 2011, 「藤村操の「哲学的自殺」についての精神病理学的一考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』(22): 139-146.
- 大谷 いづみ, 2013, 「「理性的自殺」がとりこぼすもの：続・「死を掛け金に求められる承認」という隘路（特集 自殺論：対策の現場から）」『現代思想』41(7): 162-177.
- 大野 更紗, 2013, 「狂気が希望に転じるとき（特集 自殺論：対策の現場から）」『現代思想』41(7): 68-71.
- 安岡 直, 1999, 「普通に生きていくということ（特集 自殺の流行と自死の思想）」『発言者』: 78-84.
- 山田 陽子, 2013, 「自死の「動機」の語彙」としての「うつ病」：労災保険における「自死=病死=災害死」という構図（特集 自殺論：対策の現場から）」『現代思想』41(7): 81-97.
- 朝倉 喬司, 2005, 『自殺の思想』太田出版.
- 榊原 哲也, 2011, 「「生きる意味」を支えるもの：「自殺に傾く人」へのケアについての現象学的一考察」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集』(30): 34-47.
- 福田 和也, 1999, 「希望と誠実の自死（特集 自殺の流行と自死の思想）」『発言者』: 38-42.
- 藤原 司, 2004, 「自殺はなぜいけないのか」『フィロソフィア・イワテ』(36): 1-12.
- 西部 邁, 1999, 「今月の発言 自死は精神の自然である（特集 自殺の流行と自死の思想）」『発言者』: 10-14.
- 近藤 剛, 2011, 「自殺観の研究のための覚書：思想的な素描」『神戸国際大学紀要』(81): 13-27.
- 齋藤 慎爾, 2005, 「ブックハンティング 2005 朝倉喬司著『自殺の思想』」『出版ニュース』: 20-21.

【自殺と文学】

〈国内〉

- 井尻 千男, 1999, 「三島の自死と江藤の自死 (特集 自殺の流行と自死の思想) 『発言者』: 74-77.
- 今野 紀子, 2005, 「メタ認知アプローチによる「ネット自殺」防止教育の実践研究」『東京電機大学総合文化研究』(3): 129-132.
- 原 昌, 2011, 「自殺者の文学(その1)墓前に捧ぐ」『児童文化』(43): 59-70.
- 坂口 安吾, 1950, 「麻葉・自殺・宗教」『文芸春秋』28(1): 120-127.
- 大原 健士郎, 1972, 『作家と自殺』至文堂.
- 宝泉 薫・芥川 龍之介・堀 辰雄・有島 武郎・夏目 漱石・森 鷗外・久米 正雄・宮沢 賢治・太宰 治・久坂 葉子・坂口 安吾・梶井 基次郎, 2010, 『自殺ブンガク選: 名文で死を学ぶ』彩流社.
- 寺山 修司, 2006, 『青少年のための自殺学入門』河出書房新社.
- 山内 春光, 1999, 「倫理思想研究と社会情報学: 漱石『こころ』・三人の自殺を事例として」『群馬大学社会情報学部研究論集』6: 53-75.
- 山崎 国紀, 1986, 『自殺者の近代文学』世界思想社.
- 岡本 道雄, 1964, 「有島武郎の自殺: 近代日本思想史の一断面」『大阪女子学園短期大学紀要』8: 183-202.
- , 1963, 「有島武郎の自殺とキリスト教: 近代日本思想史の一断面」『論集』9(3): 39-64.
- 末木 新, 2013, 『インターネットは自殺を防げるか = can the Internet Prevent Suicide?: ウェブコミュニティの臨床心理学とその実践』東京大学出版会.
- 朴 順伊, 2002, 「夏目漱石『こころ』と李光洙『無情』--両作品における「自殺」をめぐる」『久留米大学大学院比較文化研究論集』(12): 231-246.
- 柳澤 浩哉・ヤナギサワ ヒロヤ・Yanagisawa Hiroya, 2008, 「Kはなぜ自殺したのか--『こころ』の謎を解く」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』(57): 199-207.
- 植田 康夫, 2008, 『自殺作家文壇史』北辰堂出版.
- 権 赫建, 2005, 「日韓近現代文学作品に現れる投身自殺の比較研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』8: 163-181.
- 毛利 優花, 2013, 「『自殺の歌』の思想性: 荒井由実「ひこうき雲」論」『金城日本語日本文化』(89): 49-61.
- 渡辺 淳一, 1986, 『自殺のすすめ』文芸春秋.
- 王丸 勇, 1971, 「自殺と宗教-仏教を中心 (作家と自殺)--(自殺の心理と背景)」『国文学解釈と鑑賞』36(15): 27-34.
- 立石 巖, 1991, 『西行・世阿弥・芭蕉: 自殺者の系譜』世界聖典刊行協会.
- 芦谷 信和, 2007, 「独歩「竹の木戸」--お源自殺の原因」『言語文化論叢』1: 1-7.
- 高橋 祥友, 2012, 『「死にたい」気持ちをほぐしてくれるシネマセラピー上映中: 精神科医がおススメ自殺予防のための10本の映画』晶文社.

〈国外〉

- Chkhartishvili G.・越野 剛・清水 道子・中村 唯史・望月 哲男, 2001, 『自殺の文学史』作品社.
- 権 赫建, 2005, 「日韓近現代文学作品に現れる投身自殺の比較研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』8: 163-181.
- 清水 孝純, 2010, 「ドストエフスキーと自殺--『悪霊』に見るその様相 (総特集 ドストエフスキー)」『現代思想』38(4): 208-214.

【自殺と文化・社会】

〈国内〉

- Osgood Nancy J.・野坂 秀雄, 1994, 『老人と自殺: 老いを排除する社会』春秋社.
- Picken Stuart D. B.・堀 たお子, 1979, 『日本人の自殺: 西欧との比較』サイマル出版会.
- Samuels David, 2007, 「米国人記者が見た"もう一つの伝統文化" 自殺大国ニッポンをゆく 「誰か、一緒に死のうよ」 (世界が見た nippon)」『クーリエ・ジャポン』3(8): 26-31.
- いのちの電話・日本自殺予防研究会, 1979, 『自殺予防と死生観』星和書店.

- グループ一九八四年, 1984, 『日本の自殺』 PHP 研究所.
- 上野 正彦, 2012, 『自殺の9割は他殺である』カンゼン.
- 南 俊秀, 2011, 『不況自殺を科学する』大学教育出版.
- 唐木 順三, 2010, 『自殺について: 日本の断層と重層』弘文堂.
- 大野 敏明, 2013, 『切腹の日本史』実業之日本社.
- 天田 城介, 2013, 「老いらくの自殺: ポスト経済成長時代の超高齢社会から排除される人たち (特集 自殺論: 対策の現場から)」『現代思想』41(7): 98-109.
- 宮武 外骨, 1932, 『近世自殺者列傳』半狂堂.
- 島崎 昇平・大西 良・占部 尊士, 2010, 「高齢者の自殺予防の理論的展開--デュルケームの自殺論とパットナムのソーシャルキャピタルの概念を用いて」『久留米大学大学院比較文化研究論集』(26): 27-35.
- 島菌 進, 2007, 「浮世の死生と自殺」『臨床精神病理』28(2): 99-101.
- 川人 博, 2010, 『過労死・過労自殺大国ニッポン: 人間の尊厳を求めて』編書房; 星雲社 (発売).
- 川崎 末美, 1996, 「高齢者の自殺原因に関する社会・文化的考察--沖縄と岩手の調査を通して (特集:高齢者の自殺)」『家族研究年報』: 88-98.
- 平岡 エレン美幸・田村 優佳・加藤 匡宏, 2011, 「日本における自殺企図に関する心理社会的要因: 比較文化の視点から」『愛媛大学教育学部紀要』58: 179-184.
- 張 雲松, 2010, 「自殺から集団自殺へ--現代日本人の若者心理変化から」『指向』(7): 171-179.
- 斎藤 貴男, 2012, 『強いられる死: 自殺者三万人超の実相』河出書房新社.
- 本橋 豊・金子 善博, 2008, 「高齢者自殺の文化的側面 (特集 高齢者の自殺と自殺予防)」『老年精神医学雑誌』19(2): 176-182.
- 杉尾 浩規, 2005, 「「人格と自殺」再考--レイモンド・ファースを事例として」『南山考人』(33): 3-20.
- , 2009, 「フィジーにおける自殺の概要 (2003-2007)」『環太平洋・アイヌ文化研究』(7): 1-12.
- , 2010, 「フィジーの自殺--先行研究の批判的分析」『環太平洋・アイヌ文化研究』(8): 31-40.
- , 2008, 「人格,殺人,自殺--フィジーにおける殺人・自殺に関する一考察」『環太平洋・アイヌ文化研究』(6): 15-29.
- 松本 寿昭・若林 佳史・小森田 龍生・小牧 奈津子・松山 博光・安田 和子・田所 満理奈・反町 吉秀, 2013, 「予防に向けた自殺の要因に関する研究:世代・文化・コミュニティの視点から」『International Journal of Human Culture Studies』2013(23): 198-202.
- 松永 幸子, 2012, 『近世イギリスの自殺論争: 自己・生命・モラルをめぐるディスコースと人道協会』知泉書館.
- 森 繁哉, 2005, 「自殺--分からなさからの出発 (特集 暴力のフォークロア)--(暴力の民俗)」『東北学 第2期』(3): 141-143.
- 清水 康之・上田 紀行, 2010, 『「自殺社会」から「生き心地の良い社会」へ』講談社.
- 清水 康之・湯浅 誠, 2010, 『闇の中に光を見いだす: 貧困・自殺の現場から』岩波書店.
- 澤田 康幸・上田 路子・松林 哲也, 2013, 『自殺のない社会へ: 経済学・政治学からのエビデンスに基づくアプローチ』有斐閣.
- 熊沢 誠, 2010, 『働きすぎに斃れて: 過労死・過労自殺の語る労働史』岩波書店.
- 若嶋 眞吾, 1991, 「西洋における自殺と自殺観の変遷(1): 聖書時代からギリシャ・ローマ時代迄」『神戸文化短期大学研究紀要』16: 48-58.
- 荻野 昌弘, 2012, 『開発空間の暴力: いじめ自殺を生む風景』新曜社.
- 野田 正彰, 1999, 「自殺者三万人 中高年を追い詰める「自殺文化」」『論座』: 46-55.
- 高坂 正顕・臼井 二尚, 1966, 『日本人の自殺』創文社.
- 高橋 祥友, 2009, 「わが国の自殺の現状 (特集 死を受容する社会と文化--生と死をめぐる時代風景)」『神奈川大学評論』(63): 54-62.
- 鶴見 俊輔, 1960, 「切腹の哲学--自殺への行程」『思想の科学 第4次』.

〈国外・比較文化〉

- 1990, 『特集社会・文化精神医学における事例研究：自殺』星和書店.
- Baudelot Christian・Establet Roger・山下 雅之・都村 聞人・石井 素子, 2012, 『豊かさのなかの自殺』藤原書店.
- Gates Barbara・桂 文子, 1999, 『世紀末自殺考：ヴィクトリア朝文化史』英宝社.
- 北中 淳子, 2003, 「意志的な死」と病理の狭間で--自殺の医療人類学(特集:身体と医療の社会学)『三田社会学』(8): 4-11.
- 吉田 幸子・久野 幸子・岡村 眞紀子・齋藤 美和, 2005, 『ヨーロッパの自殺観：イギリス・ルネッサンスを中心に』英宝社.
- 大原 健士郎, 1978, 『自殺と文化』至文堂.
- 大野 道邦, 2003, 「文化現象としての自殺：デュルケームの「自殺論」をめぐって」『人間文化研究科年報』19: 253-264.
- 小田 晋, 2007, 「比較文化論的に見た今日の自殺・他殺の諸相--過労死自殺と自爆テロリズムを中心に(特集 自傷、自死)」『アディクションと家族』23(4): 346-352.
- 巻口 勇一郎・小倉 義明, 2006, 「多変量解析による自殺の経済社会的要因と持続可能なコミュニティ福祉形成--北欧の福祉政策、エコビレッジ、lohasにみる新たな社会文化創造の動向」『常葉学園短期大学紀要』(37): 183-211.
- 布施 豊正, 1985, 『自殺と文化』新潮社.
- , 2003, 「自殺と文化(特集 自殺予防)」『公衆衛生』67(9): 654-658.
- 武市 英雄, 2004, 「タイムスの目 「他殺」「自殺」とマスメディア--異文化コミュニケーションを」『月刊タイムス』28(8): 8-10.
- 稲村 博, 1979, 『自殺の原点：比較文化的考察』新曜社.
- 若嶋 眞吾, 1999, 「西洋における自殺と自殺観の変遷(2)：中世から近代」『神戸文化短期大学研究紀要』23: 141-151.
- 藤原 夏人, 2011, 「自殺予防及び生命尊重文化醸成のための法律」『外国の立法：立法情報・翻訳・解説』(250): 201-205.
- 蝦名 玲子・ヒューロップ マルタ, 2005, 「特別記事 文化的な手段による自殺予防を考える--ハンガリーの臨床心理学者との対談から」『保健師ジャーナル』61(10): 956-961.

【自殺と宗教】

〈国内〉

- Anonymous , 2003, 「The Way of Life Special Report 自殺激増は「宗教の喪失」故「五木寛之の世界」」『Decide』21(4): 49-55.
- Sumanasara Alubomulle, 2007, 『自殺と「いじめ」の仏教カウンセリング』宝島社.
- テクノフォーラム, 199, 『死教育における生と死の概念と自殺及び宗教との相関関係』テクノフォーラム.
- 中下 大樹, 2013, 「自殺、孤立、貧困……「苦」の現場を回る僧侶 二〇〇〇人の最期を見送って(特集 宗教が「死」を見つめ直す)」『中央公論』128(1): 56-61.
- 中野 東禅, 2005, 「自殺についての仏教の視点--現実感覚の確立とあの世への連続感」『平和と宗教』(24): 18-29.
- 坂本 堯, 2005, 「自殺について--カトリックの立場から」『平和と宗教』(24): 55-68.
- 坂輪 宣政, 2003, 「自殺の増加について」『現代宗教研究』(37): 92-110.
- 宇野 全智・寺島 英弥・岡野 正純, 2011, 「プリベンションの入り口で宗教者が出来ること(曹洞宗総合研究センター 学術大会紀要(第12回))--(教団付置研究所懇話会「自死問題研究部会」との共同企画 自死(自殺)問題に関する特別部会)」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』12: 182-188.
- 宇野 全智・野呂 靖・竹本 了悟, 2011, 「宗教界と行政の連携の可能性(曹洞宗総合研究センター 学術大会紀要(第12回))--(教団付置研究所懇話会「自死問題研究部会」との共同企画 自死(自殺)問題に関する特別部会)」

『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』12: 198-205.

- 安蘇谷 正彦, 2005, 「宗教の立場から自殺について考える」『平和と宗教』(24): 1-4.
- , 2005, 「自殺について神道の立場から考える」『平和と宗教』(24): 98-111.
- 富岡 幸一郎, 1999, 「文芸展望(60)神学における自殺論 (特集 自殺の流行と自死の思想)」『発言者』: 62-66.
- 小川 有閑, 2012, 「自殺に対する宗教者の活動について(第十三部会,第七回学術大会紀要)」『宗教研究』85(4): 1312-1313.
- 小此木 啓吾・中野 東禅・藤井 正雄・山田 一眞・渡辺 宝陽, 2013, 『仏教不遇死法話集』四季社.
- 小池 清廉, 2002, 「仏教思想から見た自殺、安楽死・尊厳死問題-阿含・ニカーヤ、律を中心に」『インド学チベット学研究』: 144-190.
- 岡野 正純, 2007, 「宗教者に聞く 身体知の回復に向けて--社会に関わる仏教と自殺問題」『国際宗教研究所ニューズレター』(56): 23-37.
- 最上 多美子, 2006, 「自殺防止ファクターとしての宗教と信仰の役割」『関西福祉科学大学紀要』9: 81-90.
- 林 拓弥, 2012, 「宗教者による自殺予防の可能性」『宗教学年報』27: 55-66.
- 渡邊 直樹, 2005, 「宗教と自殺-自殺予防活動に携わる立場から」『平和と宗教』(24): 144-155.
- 現代宗教課題研究部会, 2012, 「自死(自殺)問題に関する特別部会」『浄土真宗総合研究 = Jodo Shinshu Research』(7): 117-208.
- 磯村 健太郎(1960-), 2011, 『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む / 磯村健太郎著』岩波書店.
- 稲岡 順雄, 1959, 「日本における宗教と自殺の問題」『禪學研究』: 92-109.
- 竹本 了悟, 2011, 「宗教教団の社会活動における課題-京都自死・自殺相談センターの取り組みを通して (曹洞宗総合研究センター 学術大会紀要(第12回))--(教団付置研究所懇話会「自死問題研究部会」との共同企画 自死(自殺)問題に関する特別部会)」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』12: 146-150.
- 西出 勇志, 2014, 「自死に向き合う僧侶たち 「自殺したら成仏できないのか」という重い問い (特集 誰のための宗教: 現世の人助けか 来世の祈りか)」『中央公論』129(1): 32-39.
- 青木 新門, 2007, 『死から見る生: 自殺と終末期医療を考える』佼成出版社.
- 斎藤 友紀雄, 2009, 『自殺危機とそのケア (キリスト教カウンセリング講座ブックレット)』キリスト新聞社.

〈国外〉

- Anonymous, 2001, 「中国政府「宗教勢力弾圧」強化で蘇える悪夢-法輪功の焼身自殺エスカレート」『月刊テミス』10(3): 52-53.
- Carr G. L.・Carr Gwendolyn C.・川越 敏司, 2010, 『自殺者の遺族として生きる: キリスト教的視点』新教出版社.
- Fukuwaka Masato・福若 真人, 2012, 「レヴィナス思想における主体性と自殺の関係: 「自殺する側」に答える「自殺される側」の変容」『人間社会学研究集録』7: 27-47.
- Kilduff Marshall・Javers Ron・新庄 哲夫, 1979, 『自殺信仰: 「人民寺院」の内幕とガイアナの大虐殺』講談社.
- カンパニョーラ フランチェスコ, 2013, 「自己、社会、そして神に反して: 哲学・法学・文学に見る一八世紀イタリヤの自殺論 (特集 自殺論: 対策の現場から)」『現代思想』41(7): 226-237.
- 堀田 和義, 2008, 「死に至る断食-聖なる儀礼か自殺か?」『死生学研究』(10): 243-223.
- 富塚 俊夫, 1997, 「社会・文化編 仏教とイスラム教(2)イスラム教と自殺 (変動する中東)」『中東協力センターニュース』21(11): 32-37.
- 寺林 脩, 1982, 「デュルケムにおける宗教と自殺」『夙川学院短期大学研究紀要』7: 139-146.
- 斎藤 友紀雄, 2005, 「死ぬことなく、生きながらえて--現代キリスト教自殺論の試み」『平和と宗教』(24): 69-82.
- 氣多 雅子, 2004, 「21世紀と宗教(2)焼身自殺と自爆テロ」『春秋』(457): 5-8.
- 泉 治典, 1970, 「「殺すなかれ」--自殺・死刑・戦争などをめぐるカール・バルトの見解 (死の哲学)」『理想』: 32-44.

- 眞田 芳憲, 2005, 「イスラームと自殺」『平和と宗教』(24): 83-97.
- 福嶋 揚, 2008, 「自殺についての神学的哲学的一考察-カール・バルトと滝沢克己を巡って」『比較思想研究』(35): 100-108.
- 笹森 行周, 2008, 「仏教では自殺をどう見るか」『印度哲学仏教学』(23): 212-225.
- 若嶋 眞吾, 1991, 「西洋における自殺と自殺観の変遷(1): 聖書時代からギリシャ・ローマ時代迄」『神戸文化短期大学研究紀要』16: 48-58.
- 金 永晃, 2006, 「宗教伝統に見られる自殺と自殺幫助に関する見解(第九部会,第六十四回学術大会紀要)」『宗教研究』79(4): 1252-1253.
- 飯田 剛史, 2009, 「現代日本社会とデュルケム社会学-宗教・自殺・犯罪」『哲学論集』(56): 1-12.

平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)
分担研究報告書

自殺総合対策に必要な融合的研究
—教育的視点から考える子どもの自殺予防—

研究協力者 渡辺 弥生 法政大学文学部

研究要旨

【目的】教育的視点から子どもの自殺予防に資する融合的研究の在り方を明らかにする。

【方法】自殺総合対策大綱に記された若年層対象の重点施策を見直すとともに、子どもの自殺対策の現状と未だ十分対応されていない課題を抽出する。

【結論】自殺予防に寄与し、かつ実行可能な学校予防教育を提言した。

A. 研究目的

教育的視点から子どもの自殺予防に資する融合的研究を明らかにする。

対応が重要である。さらには、自殺が起きてしまった場合の周囲の人たちの心のケアについて考えることが必要である。

B. 研究方法

1. 自殺総合対策大綱をもとに

教育的視点から自殺総合対策に有効な提言をしていくためにも、まずは今一度自殺総合対策大綱で、特に若年層対象に指摘されていることを概観する必要がある。まずは、そこで記述されていることをまとめた。

【背景と課題】

児童は精神的な安定を損ないやすい。心の傷は生涯にわたって影響する。若年層の自殺は増加傾向にあり深刻である。背景には、核家族化、少子化、経済の変化、メディアなどの情報媒体の変化など社会状況の変化がある。こうした変化は、青少年の心の健康の保持・増進や良好な人格形成、ストレスに直面したときの対処法などの健康面に必ずしも望ましい影響を与えていないところがある。そのため、心の健康を育み、ストレスに適切に対処できる教育として、「予防教育」を重視することが重要である。また、自殺に密接に関連すると指摘されているいじめへの対応を視野に入れておく必要があるほか、若者の場合に自傷行為などが少なくないことから、自殺未遂等の子どもへの

【現在の重点施策】

○ 大まかな対応策

自殺の特徴や傾向を分析し、自殺予防のあり方について調査研究するよう要請されている。国民に広く知らしめることとして、体験活動、世代間交流の活用、命の大切さを実感できる教育、生活上の困難やストレスに直面したときの対処方法を身につけるための教育の実施と環境づくりが具体的に指摘されている。同時に、メディアリテラシー教育と情報モラル教育、違法・有害情報対策を推進していく必要がある。

○ 人材養成と心の健康づくり

こうした対応策や知見について、学校スタッフ(担任、養護教諭、スクールカウンセラー、教育相談担当)が情報を共有できるような研修が必要である。その際、性的マイノリティなどの人権教育も含まれるべきである。また、心の健康づくりのしくみをつくるため、保健室やカウンセリングルームを開かれた場として活用し、相談体制の充実をはかることが急務である。事業場としての学校の労働安全衛生対策についても推進するべきである。

○ 子どもの心の診療体制の整備の推進

こうした視点に立ち、子どもの心身をともに丁

寧に診療できる医師の養成が求められる。

○ いじめをなくすための家庭、学校、地域の連携

いじめを予防し、早期に介入するためにも、子どもが気軽に相談できる電話相談や、家庭、学校だけではなく地域ぐるみで対応できるような人権擁護委員などによる人権対策も視野にいれる必要がある。

○ 自殺未遂、自殺後のかかわった人へのトラウマのケア

身近にいる親など、周囲にいるものにとって若い命が失われることの喪失感や衝撃は想像を超えるものである。こうしたトラウマに対応するために、このような人たちを温かく支援するしくみが必要である。

2. 子どもの自殺の実態と現在すでに実施されていること

1979年のいじめ自殺という言葉が登場した年、アイドルの自殺の後に誘発されたかのように自殺が続いた。1986年は、突出しているかのようだが、平均して300人前後で推移。自殺率でみると、少子化傾向のために上昇しているとも考えられる。全自殺者の中に占める未成年者の割合は約2%である。

すでに、こうした実態および自殺総合対策大綱を受けて、文部科学省では、教師が「ゲートキーパー」になるよう「教師が知っておきたい子どもの自殺予防」という手引きが作成され、平成21年3月に配布されている。ここでは、自殺を予防する知見を提供し、未然に自殺を予防する対策について記載されている。内容的には以下のことが項目として立てられている。

○ 自殺の予兆を知る背景

(自傷行為、自殺未遂、心の病、家庭環境の問題、独特のパーソナリティ、喪失体験など危機への遭遇、孤立感など対人関係の問題、安全や健康を守れない傾向)

○ 自殺直前のサイン

(自殺のほのめかし、興味を失う、集中できなくなる、動物や年下の子へ虐待、自殺計画の具体化、

成績が落ちる、落ち着かない、投げやりな態度、身なりの変化、身体の不調、不登校、引きこもり、乱れた性行動、自傷行為、過度に危険なことをする、自殺について文章を書いたり、絵を描いたりする、けがを繰り返す、アルコールや薬物の乱用、家出など非行、喪失体験、整理整頓・大切なものをゆずるなどの別れの用意)

○ 対応の原則-TALKの原則

(1) Tell :

言葉に出して心配していることを伝える

(2) Ask :

「死にたい」という気持ちについて、素直に尋ねる

(3) Listen :

絶望的な気持ちを傾聴する

(4) Keep safe :

安全を確保する

○ 対応の留意点

(1) ひとりで抱え込まない :

チームによる対応をする

(2) 急に子どもとの関係を切らない :

関わりすぎて疲れ、急に関係を切ってしまうことは子どもに不安を与えるので、継続的な関係は維持する

(3) 秘密にしてほしいという子どもへの対応 :

子どもの気持ちを尊重しつつも、保護者やその他の教員と相談する

(4) リストカットへの対応 :

あわてないで関係機関につなげる

○ 自殺に追いつめられる子どもの心理

発作的にとみえる自殺も、背景には、リスクな心理状態(孤立感、無価値観、絶望感、心理的視野狭窄)が続いていると思われ、少なからずSOSのサインをみせているとも考えられ、早期介入が求められる。

C. 考察

3. 今度対応すべき課題

3.1 子どもの特徴を把握する

追いつめられやすい心理的特徴として、すでに